

災害ボランティアの活動



水害によって、堆積した土砂をかき出す高校生

災害ボランティアの活動内容

被災地のためにできること

- ・被災した家屋などの清掃
- ・避難場所にて炊き出し
- ・募金
など

被災地へのボランティアを行う際の注意

- ・ボランティア・センターに登録する(地域の人々の支持に従う)
- ・水、食料などは持参する(被災地の水・食料は被災者のためのもの)
- ・被災地にむやみに物資を送らない(ありがた迷惑になる)

日頃からできること

- ・地域の防災訓練に参加し、運営を手伝う
- ・地域の一人で避難することができない人への支援
など

【台風9号】ボランティア140人、バスで現地入り

2009.8.15 12:14

台風9号に伴う豪雨で大きな被害が出た[兵庫県佐用町](#)と[宍粟市](#)に15日、県社会福祉協議会が運営する「ひょうごボランタリープラザ」([神戸市中央区](#))が募った日帰りボランティア計140人がバスで到着した。被災地では家屋の泥取りや水につかった家財道具の運搬など人手不足が深刻化しており、ボランティアの数は日ごとに増加。復興に向け、善意の輪が広がっている。



バスで現地入りの体力自慢の100人＝兵庫県佐用町、15日午前9時55分(佐藤裕介撮影)

この団体は15、16の両日、[神戸市内](#)から被災地にボランティアを派遣する無料送迎バスを運行。ボランティアらは午前7時、バス計5台に分乗し、JR神戸駅前を出発した。

このうち12歳～75歳の102人が午前9時半ごろから続々と、[佐用町](#)の県立[佐用高校](#)に到着。町の[ボランティアセンター](#)のスタッフからオリエンテーションを受けた後、数人ずつに分かれ、被災住宅を訪問した。

休暇を利用して訪れたという[兵庫県西宮市](#)の[消防士](#)、日下部達也さん(23)は「阪神大震災で祖母から、ボランティアに助けられたと聞いていたので、少しでも被災者の助けになりたいと思ってきた」と話した。

無料送迎バスには16日も158人が参加の予定。[佐用町](#)では14日現在、1日当たり約1000人のボランティアが活動しており、今後も増加が予想されている。

2009年9月10日 産経新聞

次世代に引き継がれる「相互扶助」 高校生が災害ボランティア

今年8月、台風9号に伴う豪雨で死傷者を出す水害に見舞われた兵庫県西北部。被害が集中した佐用町や宍粟市では各地から集まった県立高校生がボランティアとして被災現場に入り、救援活動が続いている。地元の作用高校のように学校ぐるみで参加を呼びかけたところもあり、参加校は県内17校、参加者は延べ約1400人に上る。14年前の阪神大震災を記憶にとどめない世代だが、震災で芽生えた“相互扶助”の精神は次世代にも確実に受け継がれているようだ。

8月28日。佐用高校では2学期の始業式が開かれ、全校生徒と教職員で今回の水害で亡くなった人への黙祷(もくとう)をささげた。町内はようやく落ち着きを見せ始めていたものの、佐用川に架かる橋の欄干の片側が崩れるなど、いたるところに水害の傷跡が残っていた。

水害は8月9日の夜に発生。89ミリという観測史上最大の時間雨量を記録し、佐用町内では床上・床下浸水などの被害が集中した。このため、同校では生徒、教職員の安否確認を進める一方、野球部と柔道部の生徒が自主的にボランティア活動を開始。同時に、同校のホームページでも全校生徒に参加を呼びかけるなどして、学校をあげてボランティア活動をすすめた。これまで全校生徒の半数以上にあたる延べ約370人の生徒が活動に参加。教職員も延べ約150人が参加し、家屋内に流れ込んだ泥のかき出しやゴミの清掃などに取り組んできた。

ボランティア活動は初めての生徒が大半だが、バドミントン部の2年生同士で参加した小林由季さん(16)は「いろんな人の温かさに触れることができた」。西本梨乃さん(17)は「精神的にもつらいはずの被災者の方々の明るさに接し、逆に“元気”をもらった」。上山咲希さん(16)も「ほかの地域でこのような災害が起きたら、今度は私たちが救援活動に行きたい」と話す。

一方、今回の水害で床上浸水など大きな被害を受け、県内各地から集った高校生ボランティアの支援で復旧にこぎつけた酒店の店主、長谷川治雄さん(74)は「泥まみれになるのもいとわず助けていただき感謝しています。若い人の力を実感した」と語った。

兵庫県では1995年に6400人以上の死者を出した阪神大震災が起きているが、若い世代にはその記憶も風化しつつあるのが実情だ。しかし、今回の水害では「自主的にボランティア活動に参加しようという高校生の動きが自然な形で広がっていった」(県教委)という。

それだけに、ふだんからボランティア活動を行っている佐用高校JRC(青少年赤十字)部顧問の藤本慎司教諭は「生徒自身、困っている人の目線で物事を考え、提案することを学ぶきっかけになったのでは」。

同校の河野雅晴教頭も「今回の体験は生徒がこれから生きていくうえで必ずプラスになるはず。しっかりと受け継いでいってほしい」と話している。

